



Title	<書評>Rogers Brubaker “Grounds for Difference” Harvard University Press 2015
Author(s)	齋藤, 僅介
Citation	年報人間科学. 2018, 39, p. 57-61
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/67881">https://doi.org/10.18910/67881</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 〈書評〉

Rogers Brubaker

“*Grounds for Difference*”

*Harvard University Press 2015*

齋藤 僚介

### 1. ロジャース・ブルーベイカーと認知的視座

本書の著者ロジャース・ブルーベイカーは人種、エスニシティ、ナショナリズムとそれに関する分野において大変著名な社会学者である。日本で最も知られた著書は『フランスとドイツの国籍とネーション』(Brubaker 1992=2005)であろう。この著書は、両国の対照的なネーション理解で国籍法の違いを説明しようと試みている。つまり、「いかにして異なった国籍法が成り立っているのか」という問い合わせ「当事者がいかに世界をとらえているか」によって説明している。そして、この時からすでにその後の研究で明示化される「認知的視座(cognitive perspective)」というアプローチが通底している(佐藤2017)。

認知的視座を端的に示すと以下の3点にまとめることができよう。(1)「カテゴリー」と「集団」を識別し「集団」を実体視することなく、集団性(groupness)を変数<sup>1)</sup>として捉えること(Brubaker 2002, 2009)(2)人種、エスニシティ、ネーションを世界のなかの事物ではなく、世界についての見方であると捉えること(Brubaker 2009)(3)「人種、エスニシティ、ネーションを実体として捉える分析者の集団主義を批判しつつ、当事者が抱く集団を実体視する集団主義を「実践のカテゴリー」の作用という観点から」(佐藤2017)、その実践の過程、つまりいかにカテゴリーが実践されているのかを分析しようとする(Brubaker et al. 2004=2016)。この3点が認知的視座のアプローチの基礎的コンセプトである。

重要なのは、認知的視座と構築主義の違いである(佐藤2017)。Brubaker(2009)によれば、自身も構築主義者である。しかし、認知的視座は当事者たちのカテゴリーを用いた発言や行動それ自体は実在を認めるのである。ブルーベイカーは、構築主義者はカテゴリーが構築されていることは示しているが、いかに構築されているのかにあまり注目していないと指摘している。このことは批判的に新しいものではない(Brubaker 2009)。しかしブルーベイカーによれば、このような視点は数十年前まではほとんど無視されてきたようである。Brubaker(2009)では、分析者が集団を実体として捉えず、当事者がどのようにカテゴリーを用いて実践しているのかを問うアプローチを認知的視座のアプローチの観点から整理している。

ブルーベイカーが認知的視座を明確に表明するのは2000年代からであり、「集団なきエスニシティ」(Brubaker 2002)と「認知としてのエスニシティ」(Brubaker et al. 2004=2016)が最も重要である(佐藤2017)。本書はこの二つの重要な論文を含む『集団なきエスニシティ』(Brubaker 2004)の続編として執筆された(p.1)論文集である。『集団なきエスニシティ』は、集団主義がエスニシティ研究で流布されてい

ることと構築主義者の使い古された体系への批判により構成されている(p.1)。これまで主に認知的視座としてブルーベイカーが行ってきた分析は本書と比べより基礎的である。これに対し本書はより応用的である。ブルーベイカーによれば本書は『集団なきエスニシティ』よりも実在的であり、概念的な批判よりは理論的で経験的な分析に集中している。したがって、本書は認知的視座のアプローチが明示されていない。しかし、本書においても認知的視座のアプローチが意図され用いられていることが読み取れる。よって本稿では、内容の紹介と合わせて、認知的視座のアプローチがどのように使われているのかも考察していきたいと思う。

## 2、内容と認知的視座

本書は今まで著者が主に研究してきた人種、エスニシティ、ネーションについての研究であるとともに新しい3つの関心からの研究もある。近年の世界についての議論として3つの回帰すなわち格差(inequality)の回帰（第1章）、生物学の回帰（第2章）、聖なるものの回帰（第3章第4章）、それに加えエスニシティとナショナリズムのトランスナショナルでグローバルな次元（第5章～第7章）によって構成されている。「エスニシティとナショナリズムのトランスナショナルでグローバルな次元」については日本語訳が出版されていることもあり<sup>2)</sup>、本稿では内容には触れないこととする。

「格差の回帰」として著者は社会的カテゴリーがどのように格差を生み出すのかについて議論する。本章で著者はまずカテゴリー化をフォーマルになされるものと、インフォーマルになされるものに分けている。著者が第1章で取り上げたのはシティズンシップ、ジェンダー、エスニシティである。シティズンシップはフォーマルで、ジェンダーとエスニシティはインフォーマルである。続いて、ブルーベイカーは、カテゴリー化を外的カテゴリー化と内的カテゴリー化に分ける。一方は他者からのステレオタイプ、認知的バイアスの様式である。他方は社会化の過程の中で内面化され身体化される様式である。この外的カテゴリー化と内的カテゴリー化のモーメント<sup>3)</sup>は全ての社会的カテゴリーで絡まりあっている。しかしそれらの程度は各社会的カテゴリーによって大きく変わりうる。シティズンシップの格差は外的カテゴリー化のモーメントによるものがほとんどである(p.26)。その意味でもシティズンシップとジェンダー、エスニシティでは格差の生み出し方が異なっている。

次にジェンダーとエスニシティの違いについて論じている。ジェンダーとエスニシティでは、外的カテゴリー化のモーメントと内的カテゴリー化のモーメントの相互作用が格差を構成している(p.39)。しかし、人間の認知過程に注目すると、根底にある構造とプロセスが異なっているとしている。根底にある構造はジェンダーでは社会的相互依存であり、エスニシティでは社会的分割(p.35)である。社会的相互依存とは、ジェンダー本質主義に基づく性別役割分業によるジェンダー間の相互依存的構造を意味している。一方、社会的分割とは住居、教育、ネットワークのセグリゲーションなどの外的カテゴリー化のモーメントあるいはエスニシティの「孤立の戦略」による内的カテゴリー化のモーメントによる分裂的構造である。プロセスについて、ジェンダーでは、外的カテゴリー化のモーメントと内的カテゴリー化のモーメントが相互作用している。すなわち、相互依存的構造にささえられ、就労に関するコストの認識という外的カテゴリー

化のモーメントによるゲートキーピングと、男女の性質についての信念の内面化という内的カテゴリー化のモーメントによる職業希望、教育選択の相互作用によって格差が起こる(p.24)。エスニシティでは社会的分割によって生み出されるビジネスニッチやリソース不足、情報不足などによる格差の生産再生産が起きる(p.34)。これらからブルーベイカーは「格差がいかに生み出されるのか」について3つの一般的なプロセス、すなわち、「割り当てと排除(allocation and exclusion)」、「人間の社会的生産(the social production of persons)」、「ポジションとその報酬(positions and their rewards)」(p.35-36)を同定する。

次に「生物学の回帰」である。二十世紀最後の数十年には、人種やエスニシティの研究において社会科学的な主観主義、構築主義的理解が優勢であった(p.48)。しかし、ヒトゲノム計画以後生物学は客観主義的理解を捨てることなく、また主観主義的な理解を否定せず復活してきた(p.48-50)。これが示したのは、集団間の差異よりもむしろ集団内の差異が大きいが、集団間の差異もまた存在することである。著者はそのことを背景にこの「生物学の回帰」の持つ含意を議論する。「生物学の回帰」は生物学と世間の理解のギャップが縮まることを意味し(p.52-53)、それは「ポストレイシズム」ではなく「ネオレイシズム」として理解されるようになっている(p.53)。つまり、客観主義的人種エスニシティ理解が再度主流になり、頑健になってきているということである。著者は、バイオ薬学、法医学、遺伝子学、アイデンティティポリティクスについて論じ、新しい客観主義者への反応の仕方を提示する。

著者の提示した反応の仕方は9つある。この中からとりわけ認知的視座の観点から論じられているものを取り上げて用法を見ていく。(1)「人種やエスニシティは、世界についての見方、世界の視界と区分の原理であり、世界のなかの分類に独立な事物ではない」(p81)ことを再確認することである。(5)～(7)社会的に定義されたカテゴリーと生物学的な「人種」を分けるべきである(p83,84)。(9)新しい人種、エスニックな客観主義は主観主義や構築主義を無価値にするものではなく、客観主義も変わっていること、そして、「当事者の原初主義」はおそらく長く残ることを知ることが重要である(p.84)。

次に「聖なるものの回帰」である。第3章「言語、宗教、差別の政治」ではエスニシティの研究にとっては、宗教は言語と比較可能な程度似ており差異が興味深いものであるとしている。ここでも著者は、宗教と言語のカテゴリーに注目し、その作用を考察している。そして、宗教と言語を比較することにより、宗教が多様性の議論の中で言語にとって代わり復活してきていることを示す。

4章「宗教とナショナリズム」では、宗教とナショナリズムはほとんど別々に扱われてきたことを受け、それ自体やその関係が「何か」ではなく「いかにして」問えばよいかを提唱する。著者は4つの方法を提示し、批判的に分析している。宗教の捉え方として、世俗化理論の衰退ではなく分化の過程（宗教から自律した領域としての経済、社会、政治の理解の特有の出現）が重要であるとし、それがナショナリズムを推し進めたとしている。本章は「「ネーション(the nation)」の名においてなされる主張に基づいたナショナリストの政治は、ネーションではなく神(God)の名において公共的生活を変形しようとする宗教的政治の形態から、それらがたとえ絡み合っていようとも別個のものとして残る」(p.118)と結論づける。

### 3、認知的視座の課題と有用性

このようにブルーベイカーの分析には、認知的視座のアプローチが見て取れる。まず第2章からわかるように、認知的視座を用い、議論を整理している。つまり、認知的視座の立場を示し(1)、分析者の集団主義を回避しつつ(5)～(7)、「当事者の原初主義」を認める(9)という整理である。

次に第1章で注目すべきなのは、カテゴリー化の様式とそのモーメントに注目し、格差創出の根底にある構造とプロセス、メカニズムを特定しようとしているということである。つまり、「カテゴリー化の様式とそのモーメントに注目」することは実践のカテゴリー（化）の作用を議論していることに他ならない。そして「格差創出の根底にある構造とプロセス、メカニズムを特定しようとしている」ことは、いかにカテゴリーが実践されているのかという過程を分析していることに他ならない。そしてそれが可能なのは、認知的視座が当事者のカテゴリー（化）実践の実在を否定しないからであろう。

ブルーベイカーは「社会的世界の視界と区分という重要原理が、意味のなさそうに見える日常行動のなかで作用する過程を明確化することにより、世界一般の中でこの原理が作用する過程を理解すること。これに寄与することを認知的視座はめざしている」(Brubaker et al. 2004=2016) ため、「いかに」あるいは「どのようにして」という問いを重視してきた。ただし、ここで注意しなければならないのは「いかに」あるいは「どのようにして」という問いを、具体的にどのようにして問えばよいかわからないことである。これは、特に経験的研究への応用に関して大変重要な点であると思われる。認知的視座は、「認知の過程とメカニズムに関する分析的な概念装置が十分に練り上げられていない」(佐藤2017) ため、何らかの一般的な解決策が現状あるわけではない。したがって現状では、ブルーベイカーが本書で行ったような研究を個別に行う必要がある。

ここで一般的な解決策を提案することはできない。しかし、何も解決策がないわけではないと思われる。ここでは認知的視座の応用についての戦略を、本書にみられるものから提示したい。まずカテゴリー（化）実践は実在するという前提のもと、構築主義を乗り越え、議論を整理する。具体的には集団性を変数として実践のカテゴリーの捉え方とその作用について、実践のカテゴリーを内的と外的、フォーマルとインフォーマル、有標と無標、「垂直」と「水平」、「における(in)」と「への(to)」などに分析的に区別することである。そしてそれらの相互作用を、当事者のカテゴリー実践として分析するという戦略である。例えば、第1章における内的、外的カテゴリー化の相互作用の分析である。こうしてカテゴリーがいかに実践されているのかを分析するという戦略である。このような戦略は、当事者の実践のカテゴリーに注目した分析をする際、試みる価値のある戦略であると思われる。

### 参照文献

- [1] Brubaker, Rogers, 1992, *Citizenship and Nationhood in France and Germany*, Harvard University Press. [= 2005, 佐藤成基・佐々木てる監訳『フランスとドイツの国籍とネーション—比較歴史社会学の考察—』明石書店]
- [2] —2002, “Ethnicity without Groups”, *Archives Européennes de Sociologie* XLIII (2): 163-189. Reprinted in *Ethnicity without Groups*, Harvard University Press, 2004: 7-27

- [3] —2004, *Ethnicity without Groups*, Harvard University Press
- [4] —2009, “Ethnicity, Race, and Nationalism” *Annual Review of Sociology* 35: 21-42
- [5] —2016, 佐藤成基・高橋誠一・岩城邦義・吉田公記編訳『グローバル化する世界と「帰属の政治」—移民・シティ ズンシップ・国民国家』明石書店
- [6] Brubaker, Rogers, Mara Loveman and Peter Stamatov, 2004, “Ethnicity as Cognition”, *Theory and Society* 33: 31-64.  
Reprinted in *Ethnicity without Groups*, Harvard University Press: 64-87. [= 2016 年, 佐藤成基訳「認知としてのエスニシティ」佐藤成基・高橋誠一・岩城邦義・吉田公記編訳『グローバル化する世界と「帰属の政治」—移民・シティ ズンシップ・国民国家』明石書店]
- [7] 佐藤成基 2017, 「カテゴリーとしての人種、エスニシティ、ネーション—ロジヤース・ブルーベイカーの認知的アプローチについて—」『社会志林』21-48
- [8] 白杵陽監修、赤尾光春、早尾貴紀、2009、『ディアスボラから世界を読む』明石書店

### 注

- 1) 集団性を変数として捉えるとは、あるカテゴリーが「集団」として用いられる性質や程度が、文脈によって可変的であると考えることである。例えば、戦争時と普段のコミュニケーションの中で使われる「ネーション」ではその集団性の程度が違うであろう。詳しくは Brubaker(2002,2004,2009) 佐藤 (2017) を参照。
- 2) 日本では主に国家やネーションの研究で著名な社会学者佐藤成基によってブルーベイカーおよび認知的視座が紹介されている。認知的視座については佐藤 (2017)において詳しく解説、考察されている。本書『差異の根拠』は論文集となっており、第6章「移民、メンバーシップ、国民国家」第7章「ナショナリズム、エスニシティ、近代」の日本語訳が『グローバル化する世界と「帰属の政治』(Brubaker2016) に収載されている。第5章「「ディアスボラ」のディアスボラ」が『ディアスボラから世界を読む』(白杵ほか 2009) に日本語訳が収載されている。
- 3) “moment” の訳語に関しては、本書においては、「瞬間」「時機」などの時間的意味よりもむしろ力学的な「運動を起こさせる傾向」といった意味を持つと考えられるため「モーメント」としている。